

「南洲翁遺訓」について

第四話

第四条 明治新政府の腐敗と墮落に対する西郷の強烈な批判（死者に恥じない生き方）

第十条 愛国忠孝の精神に則った学問の重要性（過度な西洋迎合への忠告）

西郷一族は、南朝の忠臣「菊池氏」につながる。その家紋は菊池氏が後醍醐天皇から拝領したという菊花紋（きっかもん）をあしらったものと同じである。遠祖が戦国時代に薩摩へ移ったらしい。家系としては衰微したようだが、一応は城下士であり、武士として教養もあり、自恃（じじ＝自分を信じ尊ぶ）の念も十分育っていたらしい。父は清貧謹直であり、母《椎原（しいはら）氏》は他が羨む美人であり、大らかで心優しい人だったらしく、隆盛の成長に多大な影響を与えたと言われている。隆盛の顔立ちは母似であったらしい。

西郷の人格形成の最初の地は下鍛冶屋町である。大久保はじめ多くの維新の元勳達、更に後年の東郷など明治を背負う多くの人がこの小さな町から育っている。その代表的人物が西郷隆盛であろう。



ここでの教育システムが有名な「郷中＝ごじゅう」組織であり、組織の中で互いに心身を鍛え合って武士として、また武士団の一員としての生き方を身につけていたのである。私達の場合は多少変化していたが、精神だけは伝統として受け継がれていたようだ。妙円寺参りとか、示現流の訓練とか..... e t c.

郷中では6才～12才迄を稚児（ちご）、それ以上20才迄を二才（にせ）と呼ぶ。当時は旧制第七高等学校（現鹿児島大学の前身）の生徒が教育に当たっていた。二才に成る前に終戦になったので、私は二才の教育は明確には知らない、が恐らく武道修練・和漢の教学・集団の規律や合議の精神を学び、独特な薩摩武士の共同意識や尚武（しょうぶ）の思想を養成されたと考えられる。後にイギリス人がこの教育を見聞して感銘し「ボーイスカウトは、ここに『発祥のもと』とした」と言われている。

西郷はこの組織の中で、指導者としての在り方を自得すると共に、彼の指導のもとに生活した郷党の俊才達が、後に彼の配下やブレーンとして幕末維新や明治の時代に縦横無尽の働きをすることになる。これからは西郷の人格形成に大きな影響を与えた事件等を交えながら遺訓を学んでいきたい。

さて西郷は、封建的で古色蒼然とした人物であるかの如く主張する人がいた。しかし西郷は、同時代の世界を敏感に洞察していたのだ。当時の日本が西洋文明の流入に右往左往する時に、西郷は西洋文明がどのように世界の中で影響を各国に与えているかを適確に把握していた「ふし」がある。それは「遺訓」第10条に現われている。

「人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり。国に尽し、家に勤むるの道明らかならば、百般の事業は従って進歩す可（べ）し。或（あるい）は耳目を開発せんとして、電信を懸け、鉄道を敷き、蒸気仕掛けの器械を造立し、人の耳目を聳動（しょうどう）すれども、何故電信鉄道の無くて叶わぬぞ、欠くべからざるものぞ、と云う処に目を注がず、猥（みだり）に外国の盛大を羨（うらや）み、利害得失を論ぜず、家屋の構造より玩弄物（がんろうぶつ）に至る迄、一つ一つ外国を仰ぎ、奢侈（しゃし）の風を長じ、財用を浪費せば国力疲弊（ひへい）し、『人心浮薄』に流れ、結局日本身代（しんだい）限りの外（ほか）有る間敷（まじき）也」

「訳」

人間の知恵を高めるというのは、具体的に、どういうことなのかという

と……、要するに人々を愛国や忠孝の心に目覚めさせる、ということなんだ。国家に尽す……家庭でがんばる……、そういうことの大切さを納得している人が、多ければ多いだけ、国の事業はすべて、善い方向に進展して行くんだよ。ところが、近ごろのわが国はどうだい。目に見えるものや耳に聞こえるもの……、そういう目立つところにばかり、気をとられているじゃないか。電信をかけ、鉄道を敷き、蒸気じかけの機械をつくり……そういうものをはじめて見たり聞いたりすると、たしかに人々はビックリする。けれども、そもそも“なぜ電信や鉄道が必要なのか？なぜそれらは、なくては困るものなのか？”などという根本のところは、みんな考えてはいないだろう。とにかく今は、やたらと欧米をうらやましがり、その文物を導入することから生じる善いところや悪いところの議論もしないで、家のつくりから、子供のオモチャにいたるまで、手あたりしだいに欧米の文物を導入している。“欧米のものはスバラシイ”と目を輝かせて……。そうしてなんでもかんでも輸入して、やがてぜいたくがあたりまえのこととなり、出費を重ねていくことになる。そうなったら、だんだんわが国の国力は消耗していくし、人々の心も、だんだん軽薄になってゆく。ありったけのお金を使いつくして、欧米のものを輸入しつづける……。それで、フト気がついた時は、日本は“この世代で終わり……”ということに、なってしまうんじゃないかね。

旧庄内藩士たちに語ったのは、明治三年（1870年）～明治八年（1875年）のことである。明治五年に京都―大阪間に電信が、東京新橋―横浜間に鉄道が開通し、全国的に郵便制度が整備された情報革命の時代に突入して行く時代である。この時代に浮かれることなく、西郷と同様に、この情報革命時代を予見し、この状態が国家や人民にもたらす影響について考察し、日本の独立を脅かされる可能性を指摘し、警告を発したのは福澤諭吉がいる。福澤が詳細に分析した情勢を、西郷は天性の直感で読み取っていたのである。

この遺訓は少なくとも、西郷が前時代的、封建的政治家ではなかったことを証明している。「学問をする、知恵を磨く」これは愛国、忠孝の心を開かんためである。換言すれば、愛国忠孝実行のために学問するのである。国のために尽し、家のために勤るの道を明らかにするならば、全ての事業もまた発展する。

学問というものは、国と結びつけ、また自家のものとするところに、南洲翁の炯眼（とうがん）がある。この自覚をもって学問するならば、情報、交通等の文明が国家のために役に立つのか、適するのか、……との利害得失を研究するはずである。なのに単に新しきものに目を見張り、心を奪われ外国の盛大なるを羨

んで真似をするようでは、有害そのものである。一つ一つ外国のものを仰ぎ、外国に迎合する心では奢侈（しゃし）の風を生じ、人心は独立心を失い日本は破産するであろう。西郷は機械文明を排斥するものでは決してなく、また生活の便利化を退（しりぞ）けるものでもない。この遺訓で大切な所は「人心浮薄に流れ」という項である。単なる軽薄な心や、西洋かぶれ、だけを意味してはいない。西洋の情勢に押され、真似をし、日本の独自性、独立性を失う危機を訴えているところである。その気風、気概、自尊の心を失う危機を訴えているのである。今もこの西郷の心配は、国民や政治家、学者の中に存在していないと言えるだろうか？

西郷が尊敬した橋本左内は24才ですでにオランダ語、英語、ドイツ語に堪能（たんのう）で西洋事情に精通していながら、福井藩の教育方針を書いた「明道館における布冷原案」で若者達に洋学を学ばせた上で、注意を要する点として、洋学の学びに於いて得られる利益も多いが、軽い気持ちで学ぶならば「大きな害毒が生ず」。すべてのことには大いに役に立つものは、また一方では必ず人を害する弊害を伴っていることを知れ！！……と忠告している。西郷はこのような左内の高邁（こうまい）な見識を熟知していたのであろう。



橋本 左内

この様に西郷は何事にも座標軸を重視している。そしてこの国を、どのような形の国家を創って行くべきかを考えなければ駄目だと、常に西郷は主張していた。では国家に「ものさし」や「羅針盤」を与え、目指すべき方向性を指し示すべき

政治家や官僚、教育者はどのような人間であるべきか、理想の人格像を示したのが「遺訓第四条」の有名な下記の文章である。

「万民の上に位する者、己を慎み、品行を正しく驕奢（きょうしゃ）を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思う様ならでは、政令は行われ難し。然（しか）るに草創（そうそう）の始（はじめ）に立ちながら、家屋を飾り、衣服を飾り、美妾（びしょう）を抱え、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷（まじ）き也。今となりては、戊辰（ぼしん）の義戦も偏（ひと）へに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し、戦死者に対して面目無きぞとて、頻（しき）りに涙を催（もよお）されける。

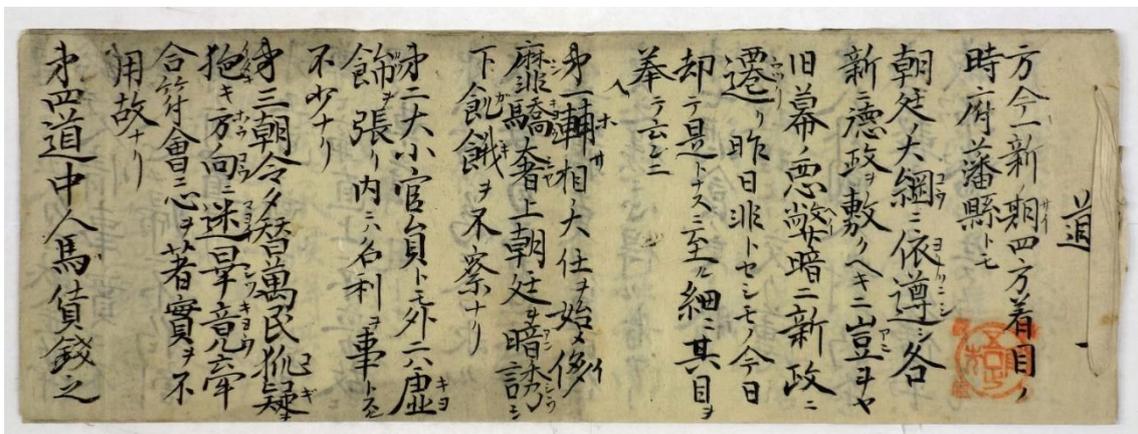
「訳」

「国民の上に立って、政治にたずさわる者は、つねに慎（つつし）みの心をもって、どこにいても品行正しく、贅沢をしないように心がけ、自分の仕事に一生懸命に取り組むような……、つまり人の手本になるような人でなければならない。政治家たちが、そういうふうに一生涯懸命に仕事をしている姿を見て、納税者たちが、「あんなに身を粉にして働いてもらって、お気の毒に……」と思うくらいでなければ、政府の命令に、納税者たちが納税して従う……なんてことはない。ところが、近ごろの政府はどうだ？ 今は、これから何もかもはじめなければならないという、いわば時代の出発点に立っている大事な時期なのに、豪邸に暮らし、豪華な服に身をつつみ、美しい女性を愛人にし、そして関心があることといたら、個人の財産を築くことばかり……。こんなことでは、何のために明治維新をなしとげたのか……。その本来の理想を達成することなど、とてもおぼつかない。あの鳥羽伏見の戦いにはじまって、五稜郭（ごりょうかく）の戦いで終わった戊辰戦争は、日本を再生するための“義”の戦いだっただけだ。けれど、その戦いの結果できあがった新政府が、そんなありさまである！ 今のままなら、どうなる？ 結果的に、あの戦争は今の政府の高官たちの“利”のための戦いだっただけ、ということになってしまう。こんなことでは、世の中の人々に対しても、私は……。本当に申し訳なくて……。」そうおっしゃると、西郷先生は、こみあげてくる思いを抑えきれず、しきりに涙を流されていました。

この文章は、大変大切な記事であろう。単に人の上に立つ者は品行方正であるべき、という至極、当然のことを言っている訳ではない。紙背に徹する読み方をすれば藩閥の利害関係に翻弄されている政治状況下にある明治新政府の腐敗と墮落を、西郷ほど正面から受け止め、厳しく批判した人も居ないのではないだろうか。しかも彼は一端政府から身を引いていた時期であり、また政府に戻っ

てきて欲しいとの要請に対し「彼等は泥棒のような奴だから、私に泥棒の仲間に入れというのか」と言って笑ったという逸話も残されている。西郷はもとより、この本務を体（たい）し、身の潔白清純を旨とし、辺幅（へんぷく）を飾るようなことはされず、自らその範を示している。

新政府の腐敗と墮落を示す例として、この実状から国家を憂（うれ）えた薩摩藩の若い武士が政府の問題点を十ヶ条にまとめた建言書を「集議院」の門にはさみ、その後抗議の意思をあらわすため、切腹して果てる……という事件が起こる。この抗議文は、この遺訓の文章の内容を分析したようなものと同様なものであって、切腹した若い武士は28才の横山安武（やすたけ）という青年で、後の初代文部大臣になる森有礼（もりありのり）の実兄にあたる。



十か条の建言書

この諫死は当時の政界に大きな衝撃を走らせ、政府や島津家からは莫大な香典が出され、安武を弔う漢詩や和歌が「勝海舟」をはじめとする多数の人から寄せられた。安武は藩邸に運び込まれた時はまだ息があり、「建言書は集議院に受け取られた」と告げると、安武は安堵（あんど）の意を示す如く目を閉じ静かに息を引き取った。

西郷は安武を讃えるための碑文を石碑に刻み（個人のため石碑に刻む文章を作ったのは、他に一度しかない）、遺髪と共に鹿児島市の福昌寺に祀った。西郷はそれ程に安武の死を心の底で深く受け止めていた。それは安武の“思い”が西郷の“思い”と同じであったからであろう。

私は、「西郷がこみあげてくる思いを抑えられず、涙を流した」との一節の文章を読んだだけでも、西郷という人がどういう人格の人なのか……、また何故

命を欠けて明治維新を実現するために奔走したのか……、そして命がけの苦勞をして、自分達が創り上げた新政府に、なぜ戦いを挑むことになったのか……いずれも良く理解できる気がしてならない。莊内藩の人達も、目の前で涙する西郷を観て肅然と襟を正される思いであったろう。

一考すれば、我が国の歴史上の偉人と呼ばれる人で、今は亡き家族、恩人、同志、友人達の「戦没者」を粗末に思い扱う人はいまい。その点で、靖国神社をないがしろにする現在の政治家は国家の恥である。西郷は戊辰戦争の戦死者のことを想い涙しているが、西郷はそれより以前、多くの同志を失ってきた人である。西郷は“死者に恥じない生き方”をしなければ……との思いが、ことのほか強かったのであろう。西郷と同様「死者に恥じない生き方」を説いた偉人は弟子の金子重輔（じゅうすけ）を失った“吉田松陰”である。

私達は、今は亡き、「若き特攻隊の思いや戦禍に散った人たちの目を意識し」日本人の道德心の基盤として生きようとしているだろうか！道德心の基盤を堅固にするべく、社会や国家は努力しているだろうか？強く心に刻むべきであろう。戦死者に顔向けできない……とまで言って、涙を流した“西郷隆盛”という人格の存在は、現代の私達のイメージや伝説を軽々と越えていく。時代に敏感な、とてつもない大きな人物であった……ことを理解して頂きたいのである。小説としての西郷とイメージが違うかも知れない。

彼の近代化に向かう、鋭い未来への国家観等はどうして生まれたのか？政治学・歴史学と異なる西郷の思想史学、または人間観を次回から覗き学びたい。

次に続く。

皇紀2679年（平成31年）2月11日

志雲会代表 有馬正能